

万博計画具体化検討ワーキンググループ準備会議 議事要旨

日時:平成31年2月18日(月曜日)10時~11時

場所:経済産業省本館2階西3共用会議室

出席委員(順不同):石川委員、齋藤委員、佐野委員、澤田委員、豊田委員、西口委員、橋爪委員

議事概要:

事務局より議事次第に基づき、ワーキンググループ(WG)の目的及び今後の進め方について説明、続いて、委員よりご意見をいただいた。

【橋爪委員】

- ・ テーマに関する新しいアイデア、あるいは深掘りするような論点、将来活躍する次世代の方々の声を聴取したい。WG委員の皆様の意見を伺いたい。
- ・ 計画段階では、従来なかった、常識を超える、21世紀を代表するような博覧会にしよう、という考えでビッドドシエをとりまとめたかと思う。
- ・ 2025年大阪・関西万博では、「共創」「Co-creation」という言葉を掲げている。できるだけ多くの方々と共にアイデアを練り、課題解決に向けて議論ができれば、と考えている。
- ・ 具体化に向けた我々専門家の議論、今後行うヒアリングも、Co-creationの一つのプロセスと位置づけたい。

【石川委員】

- ・ 日本は「世界の多くの国が欲しがるもののほとんど全てがある長寿国」を実現しており、「日本は課題先進国」と私たち自身は見ているが、他の国からそのように見えていないところもあり、「いのち」が「輝く」社会が実現されてきたとは断言しにくい。「いのち」が「消えない」という意味でGDPや寿命は延びているが、生活満足度や幸福度といった、「いのち輝く」に関する指標は全く変わっていない。
- ・ 技術革新や社会システムの改変、という「手段」が叫ばれているものの、「いのち」が「輝く」とは何なのか、という「目的」を見据えて舵を切る必要が出てくる。2025年はSDGsの達成のみならずポストSDGsを見据えねばならない年代。大阪・関西万博のテーマ、サブテーマ、及びコンセプトは、大きな可能性と重要性を有するものと理解している。
- ・ 大阪・関西万博とその開催に先立っての社会的・国際的議論においては、「いのち」が「輝く」ということの意味を再定義していく契機としたい。
- ・ 3つのフェーズで議論を整理した上で、大阪・関西万博においてこれらを包括的に提示することにしてはどうか。

まず、技術革新・社会システム整備が人々の「いのち」にどのような影響を与えてきたか

をファクトとして再整理する。

次に、「いのち」が「輝く」とは多様性、広がりがあるコンセプトなので、それを多くの国や文化に理解・受容されやすい粒度にまで言語化する。また、測定されなければ改善できないので、測定法について、具体的なイメージを固める。

最後にそのような「未来社会」をデザインする。「いのち」が「輝く」ために、技術や社会システムの活用・実装のされ方について、仮説を立てて、それを万博で提示してはどうか。

【橋爪委員】

- ・ これまで「いのち輝く未来社会のデザイン」というテーマに関して、「いのち輝く未来社会」をひとつながりの名詞として考えがちであった。「いのち輝く」という概念を切り出して、深く検討する機会はなかったように思う。新たな指摘。特に、英語表記では「輝く」というニュアンスが明確には表現されていない。詰めるべき課題。

【斎藤委員】

- ・ BIE の万博の定義は「公衆を教育すること、イノベーションを共有すること、進歩を促進すること、協力を促進することを目的とする国際的なイベント」なのだが、近年の万博はエンターテイメント色が強すぎて、何を言いたいのか、国として、世界としてどう問題解決をしたいのかがわからない。
- ・ ドバイ博日本館で打ち出したテーマは「地球交差点」であるが、これは今後日本がどういう立場に立って世界で立ち回っていくのかを再考して、日本で世界のソリューションをつなぎ、様々な産業が複雑化している中で、世界中の問題と日本が持つあるいは世界に存在する解決策をどんどんつないでいけないうか、と考えた結果。
- ・ この博覧会を新たな産業の出发点として、シェアリングというか、「Co-creation」することで、常識を超える、21世紀を代表するような博覧会にしよう、と考えている。
- ・ 思想から実装へ。デザインシンキングとか言われているが、我々現場に居る人間は考える間も無く、実装していないといけない。日本の文化として、しっかりとしたものを世に出していく、という傾向があるが、これでは時間がかかりすぎる。SDGsも同様に実験的に実装していくことが大事。
- ・ 日本のノウハウのシェアはなかなか進んでいないのが実情。Co-creationは、自分が持っているものを積極的にシェアするところが大事。シェアをしてみてもどこがビジネスになるのか、実装実践していくことでアウトバウンドビジネス的によい考える。
- ・ 建築やさまざまなものに関するデザインについて、若い才能を発掘していくべき。
- ・ ドバイ博の検討にあたって、現状の体制は少し老朽化している側面がある。例えば建築では現状デザインビルドという設計施工を1社で完結する方式だが、改めてみるのはどうか。

- ・ 万博で実装を望むこととして、まずスマートシティは国を挙げて取り組むべきものだが、日本は遅れている。日本では、同業界内でシェアする体制、適材適所業界横断で協力する体制になっていないので、万博を機に結集できればよい。関西においては、同種の機能が別々の業界に分散していることがあると聞くので、そういったところも連携が進められないか。
- ・ 医療やインフラ、ICT、機械、哲学等、様々なカンファレンスが時期も場所もばらばらに行われているが、万博の時期には、これらを週単位で入れ代わり立ち代わりで行うなど、一堂に会することができないか。
- ・ 太陽の塔も含む70年万博のレガシーを55年後の世界と比較展示できるのでは。

【橋爪委員】

- ・ 世間ではまだ「大阪」での国家イベントだと思われるように思う。北海道から九州、沖縄まで、全国の機運が盛り上がるような方策を考えていく必要がある。またサテライトについて定まった概念がない。BIEとも調整のうえ、新たな定義を提案していかねばならない。

【佐野委員】

- ・ 世界では、空爆・飢餓などさまざまな命の問題がある。誘致活動で訴えてきたテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」は、健康長寿から話が始まった経緯から、ライフサイエンスなどにイメージが限定されがちであるが、それでは世界のあらゆるコーナーの人に切実に受け止めてもらうには狭すぎる。「いのちの万博」というシンプルな地点に立ち戻ることが大切。そうすれば、それ自体SDGsに資するものともなる。
- ・ 万博を開催するとは「器をつくること」。「いのち輝く」の意味を日本がまとめるということではなく、参加各国がそれぞれの置かれた状況に基づいて「いのち」の問題やその解決策を考え、提示できるような器を提供することで、「文化多様性」時代の真のリーダーシップを示すような万博にするべきではないか。(企画する人は)作り込もうというプレッシャーを感じがちだが発想を転換するのがよい。
- ・ 万博は物を陳列するところから写真の掲出、さらに映像で表現するものへと移り変わり、それがマストかのように思われているが、映像からどう脱却するかがこれからの万博に求められている。残されたものは人同士の直接的なコミュニケーションだと思う。(出展者と来場者が)対等に議論する、意見交換する新しさを万博に入れ込めないか。それ自体を各国が出展するアトラクションとして、パビリオンで毎日でも、各国が考える「いのち」の問題を車座になって議論してほしい。
- ・ こうした議論は今から重ねていくことが大事。このWGでヒアリングの場がこれから設定されるが、それだけでなく、この万博をどうするのかという車座談義が日本の各所で展開されるような仕掛けづくりを進めていければよい。

- ・ 形式的に意見を聞くのではなく、その議論から万博を実際に作っていくことは集客にもつながる。たとえば小中学校の授業で取り上げてもらえば、自分の意見の行方を見に万博に行かずにはいられなくなる。若者には意見を聞くにとどまらず、企画書の作成を分担してもらうぐらいの参画を求めたい。大学を中心に広範に進められればと思う。そのこと自体が万博のレガシーとなるだろう。

【橋爪委員】

- ・ NPO等民間団体途が話し合う場が2005年愛知博でもあったが、以降の万博に引き継がれているかというそうではない。今回も愛知博と同様に、市民団体が参画し議論が交わされる機会を多様に用意することができればと思う。

【澤田委員】

- ・ 多くの人が集まり、たくさん関係者を作る博覧会を実現するためには、旗印がしっかりしているかどうか重要。そのイベントが何を指すのかを一言で多くの人に共有できれば、多くの人が集まって、議論を始めて、準備に入ることができる。時代が時代なので、多くの人共有する言葉が出来るかどうか今後の問題となる。直感的には、「SDGsの解決」や「いのち輝く未来社会のデザイン」では少し旗印になりにくい。愛称とうまくつながって、「私たちはこうです」と簡単に伝えられるとよい。そうすると来場プロモーションなどが非常に楽になる。
- ・ BIE1994年決議で、博覧会を「人類共通の課題解決の場」としたことで、本来は色々な人類の知恵を持ち寄らなければならないのに、テーマが狭くなり、各国が似たようなパビリオンになってしまった。その点で、「いのち輝く未来社会のデザイン」は久々にあまいなテーマでよいと思う。ミラノ万博では、テーマで各国のパビリオンをつなぐ取り組みをしていた。会場デザインも多様性が大切。
- ・ 大きなパビリオンは目立ち、それも大切だが、多くの人が集まって社会変化を起こす時は、フラットで見られることが大切。
- ・ 社会の進化と興行性の両立は大変難しい。人を集めると、どんどん興行性が高まってくる。しかし、これでは何をやってたのか解らなくなるのが博覧会の宿命。今回は、「未来社会を作る」とはっきり打ち出しているのでよい。現代はあっという間に一般化してしまうので、それに挑戦出来れば未来社会そのものが見世物になって、人を集める構造が上手くできる。これは、参加システムに全てかかっている。
- ・ また、誰がその提案を持ち込むのか。オープンイノベーションと言っても、企業は自分たちの情報を出さない。しかし、最近ベンチャー系でオープンイノベーションが起こっている。参加しないと損だという仕組みをどう作るかが重要。SDGsも同じ。コンテンツを持っている人をどう集めるのか。
- ・ 芸術文化をもっと取り入れるべき。「いのち輝く」は心が喜ぶことも重要。

- ・ 心豊かな未来を体験として提供する。私は、博覧会の興行性はこれだと考えている。博覧会に行くと、気持ちよくて何かが見られる、皆の楽しい共有感が見られる。これを一言で言えたらよい、というのが冒頭で話したこと。そして、人々がリアルにつながることに価値がある。山口で博覧会のお手伝いをしたが、つながることで皆さんが笑顔になる。ものすごい価値があると思う。あわせて、平和の価値が高まっている。
- ・ よい都市空間が重要である。

【橋爪委員】

- ・ 我々はこれまでの万博を超える新しい博覧会を企画しなければならない。2020年に開催されるドバイ万博も、超えるべき対象である。

【豊田委員】

- ・ 建築といっても、いわゆる構造体だけ考えていけばいい時代ではない。シームレスな情報やネットワーク、プラットフォームに関わらないと、本来の価値につながらない。これを踏まえて、時代が大きく変わっている。
- ・ 万博の歴史は、当時は帝国主義的なものが多くあったが、時代の中でその価値も変わってきている。万博の大きな歴史の中で考えても、今回は社会の在り方や技術のプラットフォームが急に変わっているタイミングであるので、画期的なものにする好機であると考える。
- ・ 万博は、新しい価値のあり方を、社会プラットフォームの立場から提示する可能性がある。日本型の社会プラットフォームを考えたときに、一つの街を半年間作りまた壊してしまう、そこに色々なジャンルの人が社会実装を体験して、ノウハウを共有できるのはまたとない機会である。それを企業や政府が社会全体によりオープンなシステム、データとして提供していく。もしくは、参加、貢献することで色々な新しいチャンネルが出来ていく。そこにコンテンツに縛られない価値の見方に新しいものが生まれていく機会。これを考えて、実装して、次の社会に活かしていく。
- ・ これからの5年間は非常に大きな価値を持ちうる。特に情報化において日本の企業が遅れつつある中、ものの扱い方が解らないという中で、日本のものの扱い方への知見が、金鉱となり始めている。新しいパラダイムを作るまたとない機会。

【西口委員】

- ・ SDGsのための万博と世に訴えかけた以上はきちんとやろうという事に尽きる。2025年までに継続的に具体的にやっていくが、全てゼロから日本がやる必要もない。各国(特にヨーロッパ)がアイデアを持ち寄る活動を行っているので、その活動との共創がポイント。

- ・ SDGsに対する誤解も多く、正しい理解、実装が必要。日本ではSDGsは、組織の活動を説明するためのコミュニケーションツールとの誤解が多いのだが、SDGsはゴールである。日本などの先進国などにおいては「持続可能な発展目標」と訳すべき。
- ・ SDGsは、国により優先順位は全く違う。日本も達成できていないものもある。そういう意味で、「だれ一人取り残さない」というテーマを前提にいのちを取り扱うのは各国の共感を得られやすい。毎年7月の国連本部でハイレベル政治フォーラムにおいて、各国がどのくらいSDGsを達成するかを述べるくらい、SDGsは共通言語になっている。
- ・ Co-creationには自分が主役になるものと、脇役になるものがある。どちらも重要だが、日本が主役になるものに取り組む方がよいだろう。ヘルスケアに加え、「防災・減災」は日本は実績があるので全面的に出すべき。神戸には防災・減災の主要な国際機関が複数ある。瀬戸内海全域を巻き込んで、防災・ヘルスケア・食料・など日本が比較的主役になれるものを全面的に打ち出すべき。
- ・ 最後に、SDGsと全体で言うのではなく、具体的な、測定可能な目標と、指標レベルまで取り組むべき。心に響くターゲットをいくつか選び、共創で実現していくことが重要と考える。目的を共有すると世界中から人が集まる時代。なんでもいいから寄っといで、ではいけない。具体的な成果志向にしていく必要があるだろう。

【橋爪委員】

- ・ 意見をとりまとめると、下記の7点ほどになるだろう。
- ・ 1つ目、日本はこれまでの博覧会経験含め、2025年に求められる新しい万博のパラダイムを示すことが重要。また、レガシーも議論いただかなければならない。レガシーと跡地利用が混在されがちだが、博覧会の記憶や経験こそがレガシーであって、パビリオンなどハードを残すことだけがレガシーではない。
- ・ 2つ目、SDGsを正しく理解し、中核となるテーマを選びながら、具体的に何を実行するのかを確認したい。SDGsの達成を通した文明の姿を示すことが重要。
- ・ 3つ目、いのち輝く社会とは何か、についてきっちりモデルを示す。「いのち輝く」とは何か、どのように分節化しながら深めていくのか。「デザイン」という言葉も重要。これまでテーマに「デザイン」が入ることはなかったと思う。
- ・ 4つ目、未来社会の技術を、会場にいかにも実装していくのか。
- ・ 5つ目、人間同士のリアルなコミュニケーションと、興行性との両立。
- ・ 6つ目、万博を如何に全国に波及させていくのか。サテライトの話もある。防災はとても重要なテーマになると思う。上海万博でも、四川地震の後だったので、いかに災害に対して対応するかが、中国館のメイン映像のテーマになっていた。
- ・ 7つ目、若い才能が発揮される場所にすること。次世代の担い手が、万博を契機に世界で活躍する場所とすること。

【今後の進め方(事務局より説明)】

- ・ ヒアリング対象者の選定・運営方針などについて検討を進め、次回会議では有識者より意見を聴取する。

以 上

【お問合せ先】

商務・サービスグループ 博覧会推進室

電話:03-3501-0289

FAX:03-3501-6203